

## 心理的時間に関する実験的研究 (9)

—— 健常学生群と比較した各種疾患者の「時間」イメージ ——

甲 村 和 三・小笠原昭彦\*

人文社会教室

(1987年9月5日受理)

### An Experimental Study on the Psychological Time (9)

—— Image of Time in Patients Suffering Various Disease

Compared with that in Healthy Students ——

Kazumi KOHMURA and Akihiko OGASAWARA\*

*Department of Humanities*

(Received September, 5, 1987)

This study was attempted to explore the emotional image of "time" in healthy students and patients suffering various types of disease. Image of time was measured by the Semantic Differential Method. A questionnaire consisted of 20 adjective scales was conducted on 421 patients with various types of disease such as neuromuscular, respiratory, circulatory, neurotic and psychosomatic disease and 437 healthy students (college and senior highschool students) as a control group. Healthy group was divided into 4 subgroups: male and female college students, and male and female senior highschool students. Patient group was also divided into 5 subgroups according to the type of disease.

Results were as follows: (1) As a result of factor analysis based on the healthy group's data, 4 factors were extracted. These were named as 1) evaluation, 2) mood, 3) time perspective and 4) certainty, respectively. These were similar to those extracted in our previous study. And these factors were classified by two components as a result of principal analysis based on the factor scores. These components were impatient emotion experienced in living with so little time and clocklike exactitude associated with time concept. (2) Image profiles based on the mean score of each adjective scale in college students had little difference from those in senior highschool students. This finding seemed to reflect that the image of time was already formed in prior to their senior highschool days. (3) Time image showed generally short, quick, scarce, cold, continuous, eternal, large, abstract and certain in healthy group. (4) Image profile of time in healthy group was similar in comparison with it in patient group. However, rating scores in healthy group showed inclination to the less, more continuous and more abstract tendencies in comparing with those in patients. These tendencies seemed to reflect that time was felt more necessary to play an active part in daily life for healthy group. (5) Image profiles showed little difference among each of subgroups in patients. However, rating scores in serious patients suffering Duchenne type progressive muscular dystrophy showed generally neutral for almost all scales. These tendencies seemed to be apathetic attitude to adjust their hopeless situation as we have already pointed out in previous study.

#### 問 題

「時間」には、事物・事象を秩序づける基本的概念として存在時間として包括されるような時計的時間と、生活経験を通して意識される時間（体験時間などとも呼ばれる）とがあろう。心理学はどちらの時間ともかかわりを持っているが、本研究で扱う時間は意識時間に関するものである。時間の概念についての研究は昔からあるが、特にその順序性と持続性が取り上げられることが多い。

しかし、時間にはこのような伝統的に知られている属性の外に心理的属性ともいうべき時間と行動とのかかわりから生まれた独特の時間のイメージもあろう。本研究では生活経験上の時間の“意味”，殊にその情緒的側面についての因子の構造を明らかにすることが目的である。

ところで、時間の観念については前述のように順序性と持続性を中心に、その獲得過程とか規定要因の分析あるいは量的見積もりなどについての検討が多くなされてきた（例えば Piaget, J., 1946 [Gruber, H. E. & Voneche, J. J., 1977 による]；Fraisie, P. 1957 など）。そのう

\* 国立療養所鈴鹿病院

ち、「時間」の概念の獲得についてもいくつかの研究記述がある (Piaget, J., 1946; Fraisse, P., 1957)。また、時間概念そのものではないが、幼児の時間的展望についてもこれまでいくつかの報告がなされている。これまでの諸説を総合すると、要するに「時間」概念は個体発生の初期から子供の中に在るものではなく、生活行動の繰り返しの中で覚えた時間的前後・時間的連続性の習慣化により獲得され、次第に具体的活動と離れた事象についても論理的操作が可能となって獲得される概念と思われる。多くは学校教育の中で組織的に教育される小学校低学年の頃に獲得されるとするのが定説のようである。しかし、学校で習得する多くは「時計の時間」であり、時計の針の読み方や時計の時間的前後の量的関係などについての指導が中心であり、「時間とは何か」の類いの問題ではない。まして時間的経験にまつわる情緒の問題ではない。このような小学校低学年における時間概念の習得についても、恐らく近年ではもっと早い時期に、例えば保育園や幼稚園にでも通うようになれば、あるいはもっと早い時期に生活習慣の繰り返しや、好きなテレビ番組の放送日や時間帯について大雑把ではあってもおおよその時間的順序関係などは知っているように思われる。

ところで、本論文では時間とは何かという厄介な形而上学的問題を直接的に論議することが狙いではない。その課題に代えて、時間は人々にどのようなものとして捉えられているかを心理学的に、即ち、時間的経験の豊富な成人もしくは青年期の人々を対象として彼らの行動的な意味との関連で時間の情緒的な意味を明らかにすることを主目的としている。「時間」はわれわれにとって極めて身近な日常的な概念であるが、同時に事物の存在を規定したり、変化の過程を問題にするようなあらゆる学問的分野において時間は問題にされる。物理学・生物学・哲学・心理学など多様な分野の時間を存在そのものの空間的位置変化に基づいて考える「存在時間」と意識の流れに根源をおいた「意識時間」とに大別して、それぞれの「時間」の特徴や両者の関係を論考する試みもある (伊東, 1980)。心理学が扱う時間を伊東は、存在時間の範疇に入れているが、恐らく心理現象の成立と変化が物理学における物理現象のそれらと同様、時間変数上の過程として記述されることが多いことによると思われる。

しかしながら、心理学が扱う時間はこの種のいわば心理事象の存在を規定するような時間ばかりではなく、いわゆる「心理的時間」と呼ばれるような経過時間に対する心理的印象、いわば長い・短い・速い・遅いなどの時間感 (時間の感じ) あるいは時間観 (時間に対する価値的態度傾向) ともいうべきものも対象であり、それはまさしく意識時間の範疇の時間であろう。そのような時間経過の意識は個人の時間経験として語られる (滝浦,

1975; 1976) のが普通である。即ち、事象の生起や変化、あるいは自分自身の行動の持続や変化に伴う時間を意識する際には、人はしばしば生活経験の意味を投影することが普通である。意味とは、ここでは解釈傾向として捉えようとするものであり、経験の意味として時間は時間そのものとしていうよりも、時間が何か別のものに値したり、機能したりすることを表していると解している。従って、時間の意識は経験の意味として解釈し、それはまさに個人の経験の産物であるといえてよいであろう。それはまた生活経験の違いによる時間の意味の違いの存在を示唆しているといえてよいであろう。例えば、“もう”と“まだ”との微妙な時間的ニュアンスの違いは時間を意識せざるをえない者と、しなくてもよい者との違いといえてよいであろう。

本研究はこれまで進めてきた「時間」の情緒的意味に関する分析的研究 (甲村, 1985, 1986) の一環として、健常者のみならず各種難治性疾患患者 (主に小児性) の「時間」の情緒的意味について S D 法 (Semantic Differential Method) を用いて比較検討を行うことを目的としている。なお、ここではこれまでと同様、意味を言葉 (あるいは記号) とイメージ (あるいは概念的内容) との結合として捉え、情緒的イメージとしての時間を問題にする。健常群と各種疾患患者群との時間イメージの比較により、あるいは難治性疾患間の相互比較により、行動的制約のない者と行動遂行に著しいハンディ・キャップを負った者、および同じ難治性であっても患者に与える苦痛と予後の良否など疾病の種類による違いなどに基づく「時間」観や時間的行動についての差異の有無について吟味してみようとするものである。これにより人の置かれた心理的状況の違いに伴う時間観や時間的行動傾向の形成についての知見を得ようとするものである。

## 調査の概要

### 目 的

先の「時間」イメージに関する調査 (甲村, 1985, 1986) 結果を参考にして選定された比較的少数の形容語対による S D 評定用紙を用いて、「時間」概念の情緒的意味について健常群 (男女大学生・高校生)、Duchenne 型進行性筋ジストロフィー・非 Duchenne 型筋ジストロフィー、慢性腎臓疾患、小児喘息、心臓・肺疾患などの身体疾患、さらに神経症・心身症 (登校拒否を含む) などである。

### 方 法

**S D 評定形容語対の選定:** S D 評定形容語対としては図 1 に示す 20 形容語対を用いる。この 20 の形容語対のうち、17 形容語対は先の 42 形容語対を用いた「時間」イメー

## 「時間」概念の情緒的意味に関する調査

この調査は、「時間」という言葉について、皆さんがどんなイメージをおもちになっているかを調べるものです。「時間」という言葉から感じる印象や、「時間」のイメージについて、以下の20の形容詞対のすべてについてその程度を答えて下さい。答えは該当する数字に○をつけて示して下さい。

名古屋工業大学 心理学研究室

	非	か	や	ど	や	か	非	
	常	な		ち	な		常	
			り	ら		り		
			や	でも	や	に		
				ない				
1. 気になる	1	2	3	4	5	6	7	気にならない
2. 新しい	1	2	3	4	5	6	7	古い
3. 急な	1	2	3	4	5	6	7	ゆるやかな
4. 大きい	1	2	3	4	5	6	7	小さい
5. 多い	1	2	3	4	5	6	7	少ない
6. 長い	1	2	3	4	5	6	7	短い
7. 快い	1	2	3	4	5	6	7	不快な
8. 広い	1	2	3	4	5	6	7	狭い
9. 確実な	1	2	3	4	5	6	7	不確かな
10. 速い	1	2	3	4	5	6	7	遅い
11. 変わらない	1	2	3	4	5	6	7	変わりやすい
12. 具体的な	1	2	3	4	5	6	7	抽象的な(とらえどころのない)
13. ふくらんだ	1	2	3	4	5	6	7	ちぢんだ
14. 暖かい	1	2	3	4	5	6	7	冷たい
15. 永遠の	1	2	3	4	5	6	7	はかない
16. 持続的な(たえまない)	1	2	3	4	5	6	7	断続的な(切れたり続いたり)
17. 清らかな	1	2	3	4	5	6	7	にごった
18. 絶対的な(他と関係ない)	1	2	3	4	5	6	7	相対的な(他と関係ある)
19. 積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
20. よい	1	2	3	4	5	6	7	悪い

\*「時間」という言葉のイメージを答えるとき、あなたは何を思い浮かべましたか。思い浮かべた具体的な物や事柄などをすべて書いて下さい。

\*調査年月日: 昭和 年 月 日

\*学校名( )大学・高校・中学校 ( )年在学

性 別: 男・女 年 令: ( 才)

\*氏 名: ( )

\*\* ご協力ありがとうございました。

## 図1 用いたSD評定紙

ジ調査において認められたSD評定の偏向が著しかったもの、および因子分析の結果で因子負荷量が高かったものであり、これらに〈具体的な一抽象的な(とらえどころのない)〉、〈持続的な一断続的な(切れたり続いたり)〉、〈絶対的な(他と関係ない)一相対的な(他と関係ある)〉という「時間」のより存在規定的な側面を想像させると思われる3形容語対を加えた。新規に加えた3形容語対は、先の調査で「時計的時間」を想定した回答例が多かったこと、および「時間」のSD評定に際しての具体的な想定事象として物事の変転や事象の流れを答えた者が多かったことなどによる補充である。

調査対象: 表1に示す通りである。

調査の実施方法: 調査用紙を配布後、「時間」という言葉から受ける印象やイメージなどを用紙に記された20の反対形容語対のそれぞれについて、その程度を評定して

表1 調査対象者

健常群	合計468人
	大学生(1・2年次在学生) 平均18.76歳
	男子110人 女子100人
	高校生(1年次在学生) 平均15.78歳
	男子114人 女子144人
患者群	合計269人
	Duchenne 型筋ジストロフィー (54人)
	男子 54人
	(年 齢: 13~35歳 平均19.04歳
	障害度: 中等度・重度)
	非 Duchenne 型ジストロフィーなど
	(顔面肩甲上腕型・肢帯型・神経原性筋萎縮など32人) 男子 25人 女子 7人
	(年 齢: 14~70歳 平均32.91歳
	障害度: 軽度・中等度・重度)
	喘息(91人) 男子 49人 女子 42人
	(年 齢: 13~19歳 平均15.16歳
	安静度: 軽度・中等度)
	腎臓病 [(慢性腎不全・ネフローゼ・腎炎など)
	・心臓病・結核など60人]
	男子 33人 女子 27人
	(年 齢: 13~19歳 平均15.78歳
	障害度: 軽度・中等度・不明あり)
	ノイローゼ・心身症など(ノイローゼ・心身症
	(不登校)・自律神経失調症など32人)
	男子 8人 女子 24人
	(年 齢: 13~19歳 平均15.63歳
	障害度: 中等度・不明あり)

欲しいといった教示を与えた後、健常者については各自個別記入させる。また患者群についても原則的には個別記入であるが、肢体不自由者については代理記入(指導員あるいは看護婦などによる聞き取り記入)である。なお、先の調査と同様、評定後には評定用紙末尾の空欄に「時間」イメージを評定する際に想定した事象・事物を記入させる。本調査では特に時間制限は設けない。

## 結果と考察

結果の処理: 先の「時間」イメージに関する調査研究におけると同様のデータ処理を行った。即ち、各形容語対別の平均SD評点・標準偏差(sd)などを大学生全体・高校生全体、大学生男女別、高校生男女別、各種疾患別、患者群全体について算出する。また、SD評定形容語対の因子構造を明らかにするために健常群全体について因子分析を試みる。因子分析は20の形容語対の内部相関行列から主因子解を求め、固有値1.00以上を基準に因子数を定める。それによって析出された因子についてvarimax rotationし最終因子解とする。なお、これらの計算処理には名古屋工業大学情報処理教育センターのS

PSS統計パッケージ、および柳井・高木編著：多変量解析ハンドブック・ソフト（現代数学社刊）などを利用した。

#### 結果：

I. 健常群の全回答による20形容語対の因子分析結果  
表2は健常群全体の468回答例による用いた20形容語対の因子分析結果を示している。前述の基準に照らしてvarimax rotation後4因子が抽出された。各因子に含まれる形容語対の関係、および先の調査の抽出因子のnamingを参考にして因子の解釈とnamingを試みた。

第1因子：〈長い—短い、速い—遅い、多い—少ない、急な—ゆるやかな〉の形容語対が含まれ、因子負荷量の符号から速さ・短さ・少なさが強調された量的側面の見積もりを意味しており、「評価」因子と名付ける。

第2因子：〈快い—不快な、暖かい—冷たい、よい—悪い、ふくらんだ—縮んだ、広い—狭い、清らかな—にごった〉などの形容語対が含まれる。現在のおよび将来的な展望を含んだ、しかも因子負荷量の符号から抑制的な気分の内容を意味する形容語対と思われることから「気分」因子と名付ける。

第3因子：〈持続的な（たえない）—断続的な（切れたり続いたり）、広い—狭い、永遠の—はかない、大きい—小さい〉が含まれる。形容語対群の意味的關係から時間的広がりを表すイメージを思わせる内容であり、「時間的展望」因子と名付ける。

第4因子：〈具体的な—抽象的な（とらえどころのない）、確実な—不確かな〉の因子負荷量が高い。時計的イ

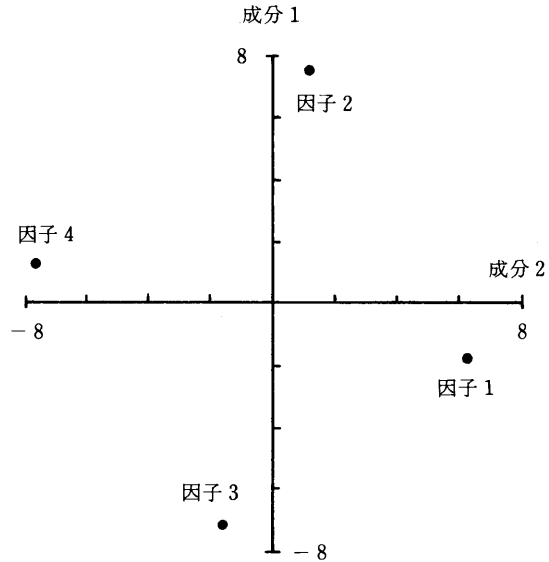


図2 健常群の4因子得点に基づく主成分負荷量  
成分1：情緒的時間成分 成分2：時計的時間成分

メージあるいは抽象的時間概念を思わせる内容かと思われ、「確実性」因子と名付ける。

以上の如く、全回答例の因子分析によって4因子を抽出したが、次には抽出された4因子の因子得点（factor score）を用いて主成分分析を試み、便宜的に2成分を抽出した。結果は図2に示す如くである。図からわかるように、第1因子と第4因子は成分2に含まれ、内容的に「時計的」時間を表わす成分と思われる。これらは2次元平面に示すとほぼ対称的位置にあり、量的な時計的時間成分（第1因子）と質的な時計的時間成分（第4因子）に分かれるようである。また、第2因子と第3因子は成分1に含まれ、これは時間的行動に随伴する情緒的成分と思われるが、これらもほぼ対称的な位置関係を成しており、一方が現在的情緒（第2因子）に対して、他方は将来展望の情緒（第3因子）であると思われる。このように、因子得点に基づく主成分分析の結果から比較の明瞭に4因子の内容的関係を理解することができよう。

#### II. 健常群の「時間」概念のSD評定プロフィールについての大学・高校生比較、各群男・女比較

図3は男女大学生、男女高校生各群の平均SD評点に基づく「時間」イメージ・プロフィールを示したものである。なお、本図は先の全回答例に基づく因子分析によって抽出された4因子別に用いた形容語対を並べ替え、4因子に含まれない形容語対をその他の形容語対として加え比較表示している。

これによれば、「時間」のSD評定プロフィール全体的傾向については大学生も高校生もかなり類似していることがわかる。大学生・高校生間の年齢的差異は〈永遠の

表2 健常群SD評点に基づく因子分析結果

形容語対	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
気になる—気にならない	-0.0902	0.0530	0.1327	-0.0238	0.0291
新しい—古い	-0.1335	-0.2150	-0.0207	-0.0509	0.0671
急な—ゆるやかな	-0.3832	0.1995	-0.0846	0.1503	0.2164
大きい—小さい	-0.0794	-0.0174	0.4223	-0.2489	0.2469
多い—少ない	0.4354	-0.1414	0.1809	0.0710	0.2474
長い—短い	0.8825	0.0011	0.0527	-0.0005	0.7816
快い—不快な	0.0434	-0.6655	0.0197	0.0291	0.4460
広い—狭い	0.1581	-0.3426	0.5070	-0.2376	0.4559
確実な—不確かな	-0.0267	0.0535	0.1604	0.4913	0.2707
速い—遅い	-0.7576	0.0150	0.0757	0.0195	0.5803
変わらない—変わりやすい	0.0644	0.0546	0.2124	0.2353	0.1076
具体的な—抽象的な	-0.0085	-0.0665	-0.0994	0.6083	0.3843
ふくらんだ—ちぢんだ	0.0219	-0.3504	0.3216	-0.2613	0.2949
暖かい—冷たい	0.0617	-0.5273	0.0400	-0.1641	0.3104
永遠の—はかない	0.1032	-0.1432	0.5029	0.1349	0.3023
想統的な—断統的な	-0.0387	0.0065	0.5702	0.0942	0.3355
清らかな—にごった	-0.0490	-0.3276	0.2633	0.1556	0.2032
絶対的な—相対的な	-0.0467	0.1175	0.2293	0.2255	0.1195
積極的な—消極的な	-0.1368	-0.1755	-0.0156	0.1925	0.0868
よい—悪い	-0.0265	-0.5119	0.2265	0.2365	0.3700
因子負荷量2乗和	1.7938	1.5153	1.4394	1.1075	5.8559
寄与率(%)	30.63	25.88	24.58	18.91	
累積寄与率(%)	30.63	56.51	81.09	100.00	

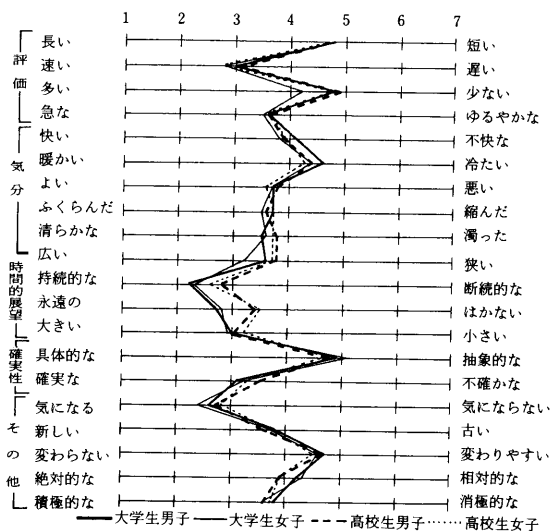


図3 平均S D評点に基づく大学生男女・高校生男女の「時間」イメージ・プロフィール

一はかない〉についてのみ各群平均評点間に統計的有意差 ( $t=2.74 > t_{.01}=2.58$ ;  $p < .01$ ) が認められ、「時間」に対する大学生の〈永遠の〉とする評定傾向が高校生のそれに比して顕著であった。

### III. 諸疾患群別「時間」イメージ比較

図4は Duchenne 型進行性筋ジストロフィー (DM D)・非 Duchenne 型筋ジストロフィー (非DMD)・喘息・腎・心肺・心身症と神経症などに分類された各種疾患別

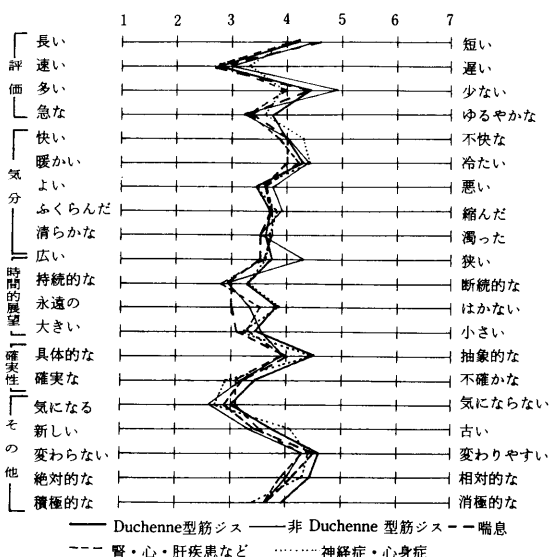


図4 平均S D評点に基づく各種疾患患者群の「時間」イメージ・プロフィール

患者群の「時間」イメージ平均S D評点プロフィールを示している。これによれば、ほとどの疾患群も似たようなイメージ・プロフィールを示していることがわかる。ただ非DMD群のプロフィールが他群のそれといくらか違いが見られ、例えば、他群に比して〈少ない〉とする評定が著しい。非DMD群の平均年齢が他群に比して高いことで、年齢的・経験的差異による時間的不足を他群よりも強く感じているのかもしれない。また、非DMD群は他疾患群に比して最も〈気になる〉傾向が著しいことも同様の解釈ができるように思われる。さらに、時間的展望因子に属する非DMD群の〈狭い〉とする評定傾向は他の疾患群に見られない傾向であり、前述の著しい〈少ない〉とする評定と連動しているように思われる。ところで、これらの疾患群の中で一番重篤な状態にあると思われるのがDMD群である。DMDとはほぼ年齢的に対応する他の難治性小児疾患群の「時間」イメージを比較してみると、ほとんどの形容語対についても類似の評定傾向を示しているといえる。評定の偏角著しい形容語としては〈速い・気になる・持続的な・変わりやすい〉くらいであり、これらは他の疾患群でもほぼ同じ程度以上には評定の偏角が見られるものであり、他群に比べて総じて中性的評定を示すものが多く、感性的な評定態度の少なさを窺わせるような傾向といえよう。また、他群に比して評定偏角の著しい形容語としては〈抽象的な・相対的な〉くらいであり、これらは心身症や神経症群の評定に似ているが、他の特に身体性の疾患群に比べて評定の偏角にいくらかの差異があるといえそうである。特に、〈抽象的な〉とする傾向はDMDと神経症+心身症群のみである。記述された「時間」概念に関連する想定事象・事物は他の疾患群と遜色はなく、理由は定かではないが、彼らの評定には時計的時間といった具体的時間だけではなく、時間の形而上的側面にもイメージが及んだのかもしれない。

いずれにしても対象疾患群の各サンプル数も違い、また病勢・予後などの違い、及びそれらの患者に与える心身の影響の深刻度の違いなど比較要件として未統制要因も多く、検討の多くは今後の展開に委ねざるを得ないであろう。

### IV. 全健常群と全患者群による「時間」イメージの全体的比較

全体的S D評定傾向には大学生・高校生間で、また男女間でほとんど差異が見られなかったこともあり、そこでそれらを一括して健常群としてまとめ、とりえず患者群全体のイメージ傾向と比較し、両群の「時間」イメージの全体的プロフィールの特徴的差異を素描してみることにする。図5はそれを図示したものである。

これによれば、基本的には両群の「時間」イメージ・

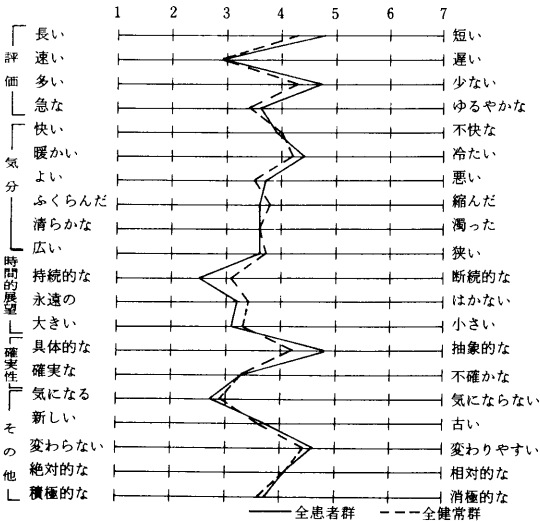


図5 全健常者群と全患者群の「時間」イメージ・プロフィール比較

プロフィールはかなりよく似ているといえるが、評定の量的差が統計的に認められる形容語対もいくらか見られた。例えば、健常群の〈少ない ( $t = 3.25 > t_{.01} = 2.58$ ,  $P < .01$ )・持続的な ( $t = 4.85 > t_{.01} = 2.58$ ,  $P < .01$ )・抽象的な ( $t = 5.79 > t_{.01} = 2.58$ ,  $P < .01$ )〉とする評定傾向は患者群のそれを凌駕しており、健常群において「時間」をより少ない・持続的な・抽象的なとする傾向が著しいことが明らかとなった。このような差異の由来については今後の検討に委ねることではあるが、健常群における方がより日常的活動と関係した時計的時間のもつ不足感・持続感が強いとともに、時間の概念としての抽象性についても意識が及んでいる想定事象の範疇の広さを示唆しているようである。

ところで、イメージ・プロフィールの類似的傾向から健常群・患者群の共通的な時間イメージを素描してみると、「時間」はかなり〈気になる・持続的な〉ものであり、また、〈大きい・短い・速い・少ない・抽象的な・永遠の〉といったイメージがあることがわかる。これらのイメージ用語群から推察すると「時間」は先の調査的研究（甲村，1985，1986）で示されたと同様、不足感・持続感を伴う行動制約的な要因としてのイメージが強いようである。また、〈短い・少ない〉とする傾向が健常群において著しいことから健常群では特に「時間」の不足感が著しいことが窺え、日常活動に制約がなく自在の活動が出来るからこそいっそう時間の不足・時間経過の速さが意識されるものと思われる。なお、SD評定後に記述させた評定に際して想定した事象・事物についても健常群・患者群とも「時計」とする記入例が圧倒的に多かったが、

この結果は先の調査結果と同じであった。恐らく、本調査で見られた「時間」の行動制約的イメージは、その「時計的時間」と密接な関連があると思われる、それが〈確実な・永遠の・持続的な〉方向への評定の偏向として認められた所以であると思われる。なお、具体的記入例としては時計が多かったことから、「時間」イメージとしても総じて時計的時間のイメージによる評定がなされたものと思われる。しかし一方では、時間を特に健常群では患者群に比してより抽象的とする評定傾向も認められ「時間」の捉え所の無さは健常群の意識においてむしろ強いこと、また、中位点からは僅かの評定偏向ではあるが、大学生において「時間」を〈相対的〉、高校生において〈絶対的〉と捉える反対の評定傾向があることなど、年齢やおかれた状況の違いなどによる「時間」イメージの差異を示唆する結果も認められ、「時間」の個別的意味の多様性を示すこれらの結果は今後の展開との関連で興味深いものと思われる。ただ、「時間」を身近な時計的なものと考え、それを基準にわれわれの行動を考えれば確かに相対的であろうし、一方、抽象的概念としての時間に重きをおけば、自分の存在とは別に全ての歴史的存在を包み込み、全ての事象を貫いて流れる時間を想定することになろうし、それ故「時間」を絶対的と捉えたとも考えられるように思われる。

## 討 論

先の42反対形容語対を用いたSD法 (Semantic Differential Method) による「時間」イメージの調査結果をもとに、用いる形容語対を20に絞り、それらを用いて男女高校生・大学生の健常群、Duchenne 型および非Duchenne 型筋ジストロフィー、喘息、腎性、心・肺性など各種身体疾患患者および登校拒否など精神的症候を主とした神経症・心身症などの難治性小児疾患群を対象に「時間」の心理的イメージを調べてみた。患者群はいずれも中学生以上の年齢である。周知のように、「時間」は一方ではあらゆる存在を規定する基本的枠組みのようなものとして捉えられるとともに、長さや速さなどの属性を有した意識の流れのようなものとして理解もされている。本調査研究は従来の経験的あるいは思弁的追求の産物としての「時間」の意識的側面、特にそこに投影されているであろう人々の日常生活に起因した情緒的側面を定量的に明らかにし、「時間」のもつ多面的側面を分類・整理することが研究の狙いである。本研究の「時間」イメージについての調査では、健常群においては発達的・性別的差異を検討するとともに、心身に基だしいハンディキャップを抱えた患者群との比較も試み、置かれた生活状況の違いによる「時間」のイメージに差異がある

か否かをも検討した。例えば、重篤な病状下にあることを自ら知る筋ジストロフィー群にとっては、“残された時間”を意識せざるを得ない状況かもしれない。あるいはまた、ハンディキャップが心的な面だけか身体的な面が主かによっても恐らく「時間」の見方・感じ方が異なっても不思議はあるまい。臨床の応用に知見を生かす狙いもあって、いささか大胆ではあったが疾患別「時間」イメージについても吟味してみた。「時間」は時計的時間として万物の変化や現象の生起を語る際に基本単位としてあるいは用語として用いざるを得ないが、一方で個人的経験の意味がそれぞれに微妙に投影されて把捉されるものでもある。“もう”と“まだ”との微妙な時間的把捉表現の差は行動目標に対する動機や期待の個人差・状況差を示唆するものである。「時間」概念についてのSD評価がこれらを明確にするほど鋭敏な感性的尺度を提供してくれるとは思わないが、しかし個人的状況差の一端は語られる期待は持ちうるように思われる。以下、結果の要約とともに総合的な考察を試みておきたい。

1. 大学生・高校生男女合計468人のSD評価資料に基づく因子分析の結果、「評価」「気分」「時間的展望」「確実性」と名付けた4因子が抽出された。抽出因子は42形容語対を用いた先の調査研究(甲村, 1985, 1986)の結果抽出された7因子群の中に含まれるものであり、抽出された4因子の因子得点を基にさらに主成分分析を試みた結果、4因子は時計的な時間イメージ(評価因子と確実性因子)成分と時間的行動に伴う情緒的時間イメージ(気分因子と時間的展望因子)成分の2成分を抽出することができた。この結果、「時間」の心理的イメージは時計的時間尺度と時間的行動尺度の基本的2次元尺度で構成することが可能である示唆を得た。またこの結果は伊東(1980)の存在時間・意識時間の分類にほぼ対応する尺度であると思われる。

2. 健常群における全体的「時間」イメージ・プロフィールを見ると、「時間」のイメージとしては評価的側面において〈短く・速く・少ない〉ものと映じているようであり、気分的側面では〈冷たい〉方へのいくらかの偏向が見られ、時間的展望の面では〈持続的な・永遠の・大きい〉とするとする傾向が著しく見られる。さらに、確実性の側面では〈抽象的な・確実な〉傾向もまた著しいプロフィールの偏向を示している。このうち性差が認められたものは大学生・高校生ともに時間的展望の側面であり、男子の〈持続的な・永遠の〉とするSD評価は女子のそれらの評価段階を凌駕していた。また高校生においては評価因子に属する〈少ない〉とする傾向のみが女子の方が男子に比して著しく、それは男女大学生の評価段階にほぼ一致する程度であった。さらに、僅かではあるが男子が「時間」を〈相対的な〉と捉え、女子が〈絶

対的な〉と捉えるといったような評価傾向の分岐の理由は不明ではあるが、例えば自己と時間のかかわりを問題にするときの性差のような存在を示唆しているようにも思われる。一方、大学生と高校生という年齢の差はほとんどの形容語で認められず、年齢的には高校1年で既に大学1・2年とほぼ同じような「時間」イメージが形成されているといえるようである。ただ、約550例に及ぶ高校1年次の調査対象例において有効対象例が258例と極端に減ってしまったことからわかるように、調査の意図が理解されなかったり、全形容語対が同じ評価段階であったり、白紙であるなどの調査状況から推察して、「時間」のようなかなり抽象的概念についてSD法を適用する年齢的な限界がこの年齢付近にありそうである。また、評価傾向について年齢の差異よりも性的差異の方がやや顕著であることは、形容語対を用いた感性的評価課題における女子の鋭敏性(感性的鋭敏性が評価段階における応答鋭敏性かは不明であるが)を示唆するものと思われる。しかしながら筆者の先の研究結果(甲村, 1985, 1986)ほどには今回の簡略化されたSD評価用紙を用いた結果では女子の男子を凌駕するような著しい評価傾向は見られなかった。

3. 患者群と健常群のイメージ・プロフィールを比較してみたが、総じてプロフィール傾向は類似し、一部の形容語対にのみSD評価の量的差が認められた程度であった。顕著な差異を示した形容語対としては健常群において「時間」をより〈少ない・持続的な・抽象的な〉とする傾向が見られた。〈少ない・抽象的な〉の形容語についてはいずれも患者群においては中性的評価段階(どちらでもない)であり、健常群ほどには感性的偏向がないと見るべきであろう。しかし健常群のこれらの傾向は生活行動上患者群以上に時間に追われていることは想像に難くないが、具体的に何に起因しての評価傾向かは現段階としては判然としない。また、〈持続的な〉については患者群でも“やや”程度の偏向は見られるが、健常群に特に著しい傾向であった。関連のありそうな〈永遠の・大きい〉なども健常群においての評価が患者群のそれを凌駕していることから、「時間」の自己存在とは離れた(個人の意識の流れとは異なる)未来永却に向かって流れ続けるものとも思っているのかもしれない。今後の研究展開の中で自己存在感とのかかわりで「時間」を改めて問うてみる必要があるように思われる。

4. 疾患別「時間」イメージ・プロフィールについても吟味してみた。サンプル数・年齢・性などの違いはもとより病状の違いや後は予後の違いなどコントロールすべき要件も多い。これら未調整のままの単純比較ではあるが、どの疾病群とも「時間」のイメージ・プロフィールの類似性は高い。この中でSD評価の偏向き著しい傾向

は神経症・心身症群であった。彼らが他の疾患群の評定を凌駕した形容語を見ると〈少ない・狭い・気になる〉などが挙げられる。〈狭い〉の解釈が容易ではないが、健常群に似たプロフィールであり、また、いかにも身体的活動制約の少なさ、退屈はしていない日常行動を窺わせる結果であるように思われる。一方、各種疾患群の中で、病状からみて恐らく最も重篤であると思われる進行性筋ジストロフィー群についてはイメージ・プロフィールの全体傾向に他群と大きく異なるところはなかったが、評定段階を見ると他群に比して中性的傾向（どちらでもない）が目立つようである。換言すればイメージ評定の鈍い応答傾向を示すものであり、課題に対する無関心によるものか、もともと情緒的応答を示すことに抵抗があるかのどちらかと思われる。ただ、河野（1976）らの指摘や筆者らのこれまでの研究（甲村ら、1980, 1981）経緯からすると進行性筋ジストロフィー群の情緒的応答性の鈍さは一種の自我防衛の反応に基づく無感動（apathy）の現れのようにも思われる。いずれにしても比較要件の等質性を勘案した上で、疾病間の「時間」イメージ比較は改めて吟味する必要がある。

〈付記〉 各種小児疾患患者の資料収集に際しては、鈴鹿・中部・長良・三重・天竜・松江・西別府・東栃木などの国立療養所児童指導員の先生方のご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

## 文 献

- Chapman, T. 1982 Time : A philosophical analysis. Reidel.
- フレッサ, P. (原 吉雄訳) 1960 時間の心理学 (Fraisie, P. 1957 Psychologie du temps) 創元社.
- Gruber, H. E. & Vonèche, J. J. 1977 The essential Piaget. Basic Books, Inc.
- Hartocollis, P. 1983 Time and timelessness. —The varieties of temporal experience, a psycho-analytic inquiry— International Universities Press.
- 伊東俊太郎 1980 存在の時間と意識の時間 (村上陽一郎編 時間 東京大学出版会所収).
- 岩下豊彦 1979 オスグッドの意味論とSD法 川島書店.
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店.
- 川本茂雄 1986 ことばとイメージ記号学への旅立ち — 岩波新書.
- 木村 敏 1980 自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学— 弘文堂.
- 木村 敏 1982 時間と自己 中公新書.
- 甲村和三・河野慶三・片山幾代・野尻久雄・宮崎光弘・小笠原昭彦 1980 心理的時間に関する実験的研究(3)—Duchenne 筋ジストロフィー患者と健常大学生の時間的展望の比較— 名古屋工業大学学報, 32, 9-16.
- 甲村和三・河野慶三・野尻久雄・宮崎光弘・小笠原昭彦 1981 心理的時間に関する実験的研究(4)—Duchenne 型筋ジストロフィー患者の時間評価— 名古屋工業大学学報, 33, 1-8.
- 甲村和三 1985 心理的時間に関する実験的研究(7)—時間の意味的構造について—名古屋工業大学学報, 37, 7-14.
- 甲村和三 1986 「時間」概念の意味的構造 第50回日本心理学会大会発表論文集, p. 310.
- 河野慶三 1976 筋ジストロフィー者の心理特性とそのCare 国立療養所鈴鹿病院, 鈴鹿, 1-33.
- 岸本末彦 1967 現代日本語における時間的表現 大阪教育大学紀要, 16, 1-12.
- 水島恵一・上杉 喬編 1982 イメージの基礎心理学(イメージ心理学1) 誠心書房.
- 村上陽一郎 1981 時間と人間—序論 (村上陽一郎編 時間と人間 所収) 東京大学教養講座3 東京大学出版会.
- ピアジェ, J. (岸田 秀訳) 1975 子どもの時間知覚 (Piaget, J. 1966 Time perception in children. In Fraser, J. T. (Eds.) The voice of time. Braziller) 月刊エビステマー12月号 70-85, 朝日出版社.
- Sherover, C. M. 1975 The human experience of time. New York Univ. Press.
- 滝浦静雄 1975 時間—その哲学的考察— 岩波新書.
- 滝浦静雄 1975 時間の言葉 月刊エビステマー12月号 104-116, 朝日出版社.
- 都築 学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.
- Wallace, M. & Rabin, A. I. 1960 Temporal experience. Psychol. Bull., 57, 213-236.